

私

は大学の建築学科で建築環境工学の分野を担当している。世間からは「学者」とか「学識経験者」と呼ばれている「人種」である。民間の企業で働いた経験もなければ、建設現場で働いたこともない。そんなわけなので、建設業の方々の琴線に触れるような話はなかなかできないと思うが、自分が仕事上関与していることの中から、普段思っていることを少し綴ってみた。

二十一世紀に入ってから、地球温暖化問題が世界の政治的な課題になり、リーマンショック以後、日本もエコポイントなどに見られるように、経済対策を兼ねた温暖化対策が国費を投じて行われるようになった。温暖化懐疑論者も存在するが、懐疑論の自身が稚拙で独断的なので支持者が増えない。そんな状況の中で三月十一日の大地震が発生し、原発が徐々に停止してしまい、再稼働の判断が政治に委ねられるという「お粗末な」状況に至っている。節電が叫ばれ、ますます民生部門の省エネルギーの重要性が増している。建築や住宅では、「ZEB」と称されるゼロエネルギー建築（消費エネルギーと取得される再生可能エネルギーが一年間の積算でほぼ等しくなる建物）が今後の最高目標であると、政府の関係者が表明し、私も賛同している。私が最近考えていることは、こうした建物や社会の低炭素化がなぜ必要で、なぜ日本が先行してやらねばならないか、ということがある。

この質問に対する解答はなかなか難しい。温暖化防止論者やエコ派の識者は、地球温暖化は様々な気象災害をもたらし、地球上で大混乱と戦争さえ招くので、すぐにでも温暖化防止のための様々な規制・政策が必要であると主張する。しかし、本当に地球

各 人 各 説

なぜ低炭素文明か

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 教授

坂本雄三

Yuzo Sakamoto



全体の温室効果ガスを顕著に減らすためには、二酸化炭素排出量のトップである中国とアメリカが即刻、大量に削減しなければならない。残念ながら両国政府にはその気配は見られない。

それでは、なぜ我々は「低炭素」とか「ZEB」を標榜するのであるのか？この質問に対して、私は「低炭素」という新たな文明的価値を普及するため」という答えを用意している。十九世紀以降、世界は産業革命に端を発した大量生産・大量消費の文明に挙って参入した。日本以外は後れてきたアジアもようやくこの文明に向かって動き出した。各家庭が暖冷房の効いた家と自家用車を所有するというこの文明に、である。しかし、この文明は温暖化というリスクを抱えている。であるから、この文明は浸透すればするほど、逆に「低炭素」の価値が高まる。「低炭素」が誰もが憧れる対象、それもリーズナブルな対価を払えば、誰でもが手に入れることができる対象になれば、「低炭素」はかつての車やマイホームみたいな庶民の「憧れ」になるのではなからうか。エネルギー効率や二酸化炭素の排出の点で、今までは圧倒的にレベルが高い車や建物を開発し、妥当な価格で販売するのである。そうすれば、そのような低炭素商品は日本だけでなく、世界の憧れとなり、日本企業が世界の市場を支配することになる。夢のような話であるが、発展途上国でも二酸化炭素の削減が実現するかもしれない。

近年、日本でもそれほど高価でないゼロエネルギー住宅が市場に登場し、「低炭素文明」の仄かな灯りが見えてきた。「低炭素文明」の構築と普及においては建設業が大きな役割を担うことになり、社会の期待は大きい。